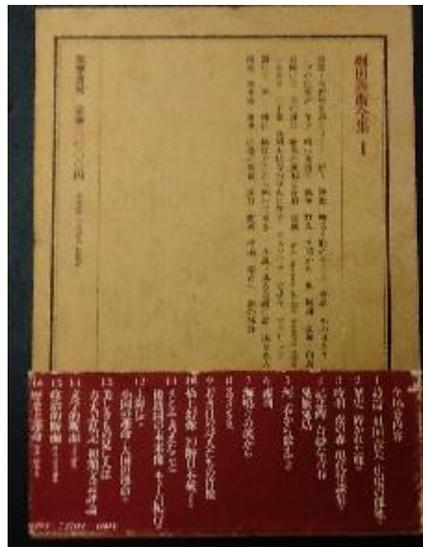
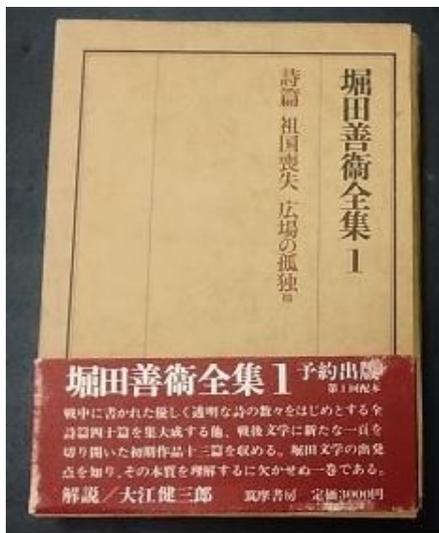


essais ころみ 2019年10月

(再掲) 2019年4月1日(月) 朝のうちは晴れ、新元号発表「令和」  
『堀田善衛全集』見なおす試み

堀田善衛全集 (筑摩書房 1974年6月20日発刊開始)



2019年10月4日(金) ようやく秋

10月に入っても残暑が続いていた。四季があいまいになって久しい。昨夕雨が降り、深夜には雷雨。そのおかげか、今朝は秋風。本当にようやく秋。涼しいとカラダの動きもいい。

— 感想・関心 — 一も二にも、「観察」

最近雨降るといえば、異常な降り方をします。昨夜テレビのテロップに何度も気象情報が出た。かつての異常気象が、これからは普通気象になるのだろう。『対岸の火事』ではないと感じる。

気象庁も注意喚起の伝達方法に注力しているよう。記者会見で『自分のいちのは自分で守るといふ…』、なんて言われて、ドキッとした。そうそう、そういう意識が大事。

そんなこんな環境に今わたしたちが生きるからか、50年前に海外で出版された本が日本で初邦訳された。定期的に郵送されてくるニューズレターの紹介文を読み、“この本は買いた…”。

『自然は導く』。まだ読み始めたばかりだけど、再認識させられること多々。人間の五感と「観察」。自分なりの体感的な学びと書物などから、その大事はよく理解しているつもりだったが、何度も“へえー!”

この本は特に、何らかの専門性をもって仕事している人には、その専門性に応じたヒントが少なくないはず。まだ四分の一程度しか読み終えていないが、そう予想する。

実際わたしは早々にピンときた箇所があった。アボリジニの人たちが「未知の領域で自分の位置を知る方法」。

『はじめは遠くまで行かない。ある程度の距離まで行って戻り、それから、別の方向へ行ってまた戻り、それからさらに別の方向へ行く。少しずつ状況がのみこめてくると、遠くまで迷わず行けるようになる』。

自分がふみ込む知の領域にも、あるいは自分ならではの仕事といき方にも、一定の示唆を与えてくれると感じた。

この本には何度もなんども、「五感」のなせる「観察」のわざを語っている。下欄に引用しているように、「観察」は自分にとって最良の教育材料。ひいては自他ともを守る術にもなる。読み進めるのがたのしみ。

2019年10月18日（金） 曇り⇔雨

今週初めは10月下旬の気温になり、少々寒かった。今日はまた高め。明日にかけて雨の予報。台風19号の被災は広範囲になった。また雨とは、なんとも…。

— 感想・関心 — 「社員」も代行？

今朝の日経「真相深層」に目がとまった。読んでちょっとビックリした。インターンシップで大学生を担当する人がその会社の社員でなく、代行業者。リクルーターの代行もあるそう。

インターンシップ自体が形骸化していて、カタチだけなら代行でOKという判断にはなり得る。それにしても、何とも空虚、フェアでもない。学生側にはまだ違いを見てとることはできなさそうだし。

この記事に目がとまったのも、一昨日就活の相談にのったからだ。弟の同僚の息子さん。めぐり巡って、大学とは違う世界の大人の話を知りたいということでやってきた。

わざわざ訪ねてくるぐらいあって、臆することもなく、人見知りせず、素直に自分の想いや考えを話し、こちらの話も聞き、なかなかの好青年であった。

いろいろと話ながら、就活についていくつか気づくことがある。一つは学生たちの目がやはりまだ利いていないということ。採用情報ばかりに気をとられ、会社全体を俯瞰して観ることはできていない様子。

もう一つは、大学の就職支援の状況。担当する職員＝大人たちの社会観というか、社会認識、社会的知性といったものが、けっこう学生たちの判断基準に影響を与えていそうということ。

学生たちの社会認識は未熟で、自分のやりたいことが明確な学生も稀。だから往々にして身近な大人たちのモノサシに引きずられる。そうかな…？と思いながら、決めていく様子。

今回相談にきた彼にとっては、日頃出会わないような大人に会い、ちょっとした発奮材料にはなったようで、「やる気になってる」との報告をうけた。それはなにより。わたしもそうして今に至っている。

2019年10月23日（水） 秋晴れ

昨日は「即位の礼」で祝日。東京は雨模様、近畿は晴れ。今朝もよく晴れている。気温は高め、10月上旬のような感じ。ただし日の出はかなり遅くなった。明日は霜降。

－ 感想・関心 － 来年の「計」に気が向き始めて

毎年だいたい9月に入ると新年の「イヤープラン」のリーフを買う。まだまだ商品は揃っていないが、ジャバラ式のこれは早々に店頭に出る。

買ったなら二十四節気と旧暦の一日、十五日、法事の日、その他諸々、自分なりの目安、印を書き入れて、当年12月の次に新年1月がくるのように仮止めテープでつなげる。来年にむけた第一弾の下準備。

そうこうして10月も上旬が過ぎた頃には本格的に来年のことが気になり始める。書店にも手帳類が揃い始める。今年も、もっとイイものがないかとあれこれ迷った挙句、いつも使っているものになった。

市販の手帳とは別に自分でつくったフォームがいくつかある。その一つ、一年の計を図るものの来年版の第一版にとりかかる。昨年のもを見ると、10月4日付だった。ことしは10月21日。

自分の人生の大きな流れ、それを「自流」を称しているが、それを頭の中に描いて、眺めて、今年の展開をふりかえり、来年へのつながりなどを想像して、何かしらの「兆し」を読みとろうと意識と感覚をひらく。

そうなるようにフォームは設計してある。じっと想いをめぐらせては書いて、書いては想いをめぐらす。こういった時間は、その時よりも、後になって、御利益がある。

やり慣れた他の事をやっている時に、頭ではそのことを考えている。すると、何か、ぱっと閃くものがある。これを逃がしてはいけない。すぐにメモしておく。ぱっと閃いたものは、ぱっと忘れやすい。

こういったことを何度かくり返して、年が明け、ばたばたして1月も終わりが近づいた頃、いくつかの閃きの中から確信めいたものに焦点が定まる。毎年同じことを言っているが、一年の計は一月末にあり。

今はまだ散策の段、ぶらぶらと自他ともの流れと変化に目配せ。

2019年10月26日（土）

大阪工芸展2019 at ATC

仕事で少し関わっている方が今年の「大阪工芸展」に入選。会場は南港のATC。こういうこともない限り行くことはないし、午後の仕事までには時間があるので、何年ぶりか忘れるぐらいに、ATCへ。



ロケーションはいいし、施設も広いのだけど、館内は閑散。前回の時にすでにそうになっていた。いまは大阪市の行政機能を一部ここへ移して活用するようになったが、それでも、「空き店舗」だらけ。なんとも「もったいない」。



工芸展の会場は、広さといい、レイアウトといい、見やすく、ちょうどいい。まずは先にお目当ての作品を探す。



どんな作品かは聞いていた。でも実物を見て、びっくり。それがうまく写真には撮れなかったが、思わず、わあーと小さく声をあげた。とても陶器とは思えない。表示に「陶芸 一般」となっているけど、それを見なければ、レースの扇、団扇と思うはず。まさか、こういう作品になっていたとは…、感服。この一年の努力の結果がここに表れたということ。来年へのよい足がかりになるにちがいない。





2019年10月31日（木）

『てんかんをめぐるアート展2019』

秋は何かをイベントの多い季節。仕事でかかわった方々がそれぞれの世界で活躍。そのお一人がアートディレクターを担当。チケットをいたがいたので、神戸商工会議所内のイベントホールへ。ご本人とも少しお話することができた。それにしても、よく頑張っておられます。

